医療制度Q&A

治療前に別の専門家に聞く

セカンドオピニオン

主治医に気兼ねせず相談を

【質問】左乳がんと診断されました。その日以来頭から離れません。病気のこと、将来のことなど誰に相談したらいいのか。そんなときセカンドオピニオンということを聞きました。詳しく説明してください。（主婦）

【回答】ご心痛のことと拝察いたします。セカンドオピニオンという言葉はこの十年ぐらい急に使われ始めました。医師が「病気のことは、おれに任せろ。素人たちがいろいろ言うな」という風潮が古くはありました。しかし最近は、患者が自分のことを知る権利、説明と同意を求める声が当たり前のこととして浸透してきました。ですから当然のこととして「情報公開」は国が推している制度の一つであり、医療界においてもそれに対応すべく努力しています。

国が定めた「情報公開」の一つとして、それぞれの医療機関における手術件数の公開、決められた件数に達していない場合、減点という誠に厳しい制度を発表しました。それに併せて、その手術の具体的説明（どういった手術をするか、時間は、起こり得る合併症、入院期間、予後など）を、口頭だけでなく文書で詳しくするよう義務付けられました。閉鎖感の強かった医療界も急速に「情報公開」が進んでいます。

このような急速な情報の提供、言い換えれば主治医の説明に、逆に家族・本人に不安と焦燥が起こることもあります。実際、医師の説明は専門用語を使い、複雑、高度になりがちです。そして、その治療が自分にとっていいのか悪いのか判断するのは難しいかと思います。

じゃあ、どうすればいいのか、ここでセカンドオピニオンの活用となります。セカンド（二番目の、別の、代わりの）オピニオン（意見、見解）とご理解ください。今かかっている先生が不満だから、気に入らないから他の医師に診てもらうのは「ドクターショッピング」と言いまして、病院から病院と渡り歩くことをいいます。セカンドオピニオンはまず同じ専門家に聞くこと。そして、例えば、がんと診断されたら、その治療を始める前に聞くというのが大原則です。

主治医との十分な話し合いの下、今までの経過、検査データすべて、できましたらカルテのコピーなど、すべての情報を提供してもらいます。本当の主治医は、それらを拒むことはないと思います。医師の気分を害するのではないかという心配は無用のものと思います。患者さんは本音で相談できる人がいないというのが一般です。医師と患者の間には、まだまだ厚い壁みたいなものがあるようです。納得いくまで相談してください。（県医師会）